

第 15 回 KOSMOS フォーラム「花・緑と人」～人はなぜ花や緑を求めるのか～

日時 2008 年 9 月 15 日（祝） 14:30～17:00

場所 TOKYO FM HALL

パネリスト

池坊 由紀（華道家元池坊次期家元）

熊倉 功夫（国立民族学博物館名誉教授・林原美術館館長）

原田 憲一（京都造形芸術大学教授）

光田 和伸（国際日本文化研究センター准教授） ※急用により欠席

コーディネーター

川勝 平太（静岡文化芸術大学学長）

（司会）大変お待たせいたしました。ただ今より第 15 回 KOSMOS フォーラム「花・緑と人～人はなぜ花や緑を求めるのか～」を始めさせていただきます。この KOSMOS フォーラムは、これまでの分析的、還元的な科学ではなく、総合的、包括的な視点でさまざまな問題にアプローチすることを目的に、毎年テーマを定めて議論を積み重ね、今年で 6 年目となります。今年度のテーマは「21 世紀の新しい環境観」です。今年度 3 回のうち、第 1 回となる今回は「花・緑と人」と題し、花をめ、緑を希求する人の心や、その文化性などについて考察させていただきます。

それでは、KOSMOS フォーラムを開始いたします。パネリストの方々にご登壇いただきましょう。京都造形芸術大学教授、原田憲一先生です。華道家元池坊次期家元、池坊由紀先生です。国立民族学博物館名誉教授・林原美術館館長、熊倉功夫先生です。

最後に本日のコーディネーターを務めていただきます静岡文化芸術大学学長、川勝平太先生です。それでは、川勝先生、どうぞよろしく願いいたします。

（川勝） どうも皆さま、こんにちは。開会が遅れて申し訳ありません。

さて今日は、ただ今ご案内がございましたように「21 世紀の新しい環境観」の第 1 回目のフォーラムです。このフォーラムは、1990 年開催の「花の万博」の理念のもとで、2003 年から、生命観、自然観、人間観という大きなテーマで、過去 14 回開催されました。その一部は春秋社から本になり、ご覧になった方も、過去のフォーラムに参加された方もいら

っしやるかもしれません。今年のテーマは「環境観」です。狙いは人間と自然がいかに調和した形で共存できるか、それを考えることです。今年は洞爺湖でサミットがあったこともあり、正面から「環境観」と題しました。

そして、私はコーディネーターとして、これを論ずるのに最もふさわしい人はどなたかということを経理局から人選を相談され、ここにご登壇くださっている原田先生、池坊先生、熊倉先生、そして光田先生と、4人の先生方を挙げたところ、全員ご快諾いただきました。なぜ地球環境を考えるのに、茶の湯の熊倉先生、お花の池坊先生、あるいは文学の光田先生なのかと思われる方がいらっしやるかもしれません。科学や技術を通して環境を考えるのが筋ではないかと思われている方がいらっしやるかもしれません。

通常、科学技術と芸術文化は、対立的にとらえられがちです。しかし、本来対立するものなのでしょうか。たしかに、政府には科技庁と文化庁があり、科技庁が「科学技術立国」を、文化庁が「芸術文化立国」を主張し、予算の分捕り合戦に接しますと、両者は対立するごとくです。しかし、そもそも科学は何のために存在しているのでしょうか。技術も何のために存在しているのでしょうか。人の幸福のためではありませんか。人の幸福を作るものこそ芸術であり、文化ではないのでしょうか。

そうであるとすれば、日本においてわれわれが誇る文化とはどのようなものなのでしょうか。一つは、お花でしょう。花は池坊由紀先生からお話があると存じますが、日本の深い伝統に根差しています。それから熊倉先生の専門の茶の湯、tea ceremony という英語にもなっている茶道です。また、光田先生が専門の俳句です。世界で最も短い詩で、アルファベットで「Haiku」でも通ずる文化です。こうしたものが、日本の持っている芸術であり、文化です。それ相応の魅力を持って文化交流をつくりあげ、人々に幸せをもたらしています。そうしたことに照らし、われわれは日本の持っている文化的伝統を踏まえて環境問題を考えてみようというのが狙いです。

先ほど述べましたように、今回は3回のうちの第1回目です。いずれも「人」が大切なので、第2回目は「森と人」、第3回目は「水と人」としました。花が最も美しいものですが、狭く取られるといけないので、第1回目は「花・緑と人」とした次第です。

文化的伝統を踏まえつつも、われわれが意識しなくてはいけないのは地球環境です。地球科学について、深い専門的、科学的知識をお持ちで、かつそれをみずみずしい感性で語ることのできる極めてまれな存在、それが原田憲一さんです。もう手をたたいている人がいらっしやるぐらい、ファンがたくさんいらっしやる。原田先生は地球科学の理科系の専

門家で、ご所属は京都造形芸術大学です。

原田先生は、地球の46億年の歴史を見せてくださるはずですが、はじめにお話しいただき、つづいて、1輪の花に宇宙、自然を宿すことのできる生け花の池坊先生に受けていただき、その花を一部とする総合芸術、生活の芸術でもあるお茶の観点から熊倉先生にお話を賜るという順序でいきたいと思います。

今日は5時まで比較的ゆっくり時間がございますので、皆さまもゆったりした気分で聞きいただければと思います。最初のプレゼンテーションの原田先生は、スライドを準備してくださっており、すこし長めにお話しいただき、それを受けて池坊先生、熊倉先生の順でお話をさせていただきますが、それぞれの話の中で若干のご自身の自己紹介と、それから、今回の問題に関する問題意識をご披露いただきます。どうぞ、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

それでは、お待たせいたしました。原田憲一先生、お願いいたします。

(原田) ただ今ご紹介いただきました原田です。専門は地質学ですが、今、芸術大学にいます。なぜかといいますと、私は昔、山形大学で地球史と生命史を教えていたのですが、あるとき、ふと気付きました。「地球はどういう星か」と学生から聞かれて、「美しくなってきた星である」と。46億年かけて今のように美しくなってきた星、しかも一番美しくなったときに出てきた大型動物が人間です。40億年前に生まれた生き物が、40億年たつてようやく意識的に美というものを作り出せる芸術家として生まれてきたわけですね。これが大きく言った場合の地球史と生命史になります。ですから、芸術が一番人間らしい。戦争とか、浮気とか、そういうものはサルでもアリでもバッタでもやっているが、自分が美しいと考えるものはこれだという形で提示できるのは人間だけです。そういうことを教えようと思って、芸術大学に移りました。

(以下スライド併用)

○「花鳥風月」という言葉が日本文化を象徴していますが、これを地球科学的に見ると、ちょうど発生の順が逆になっている。月ができて、風ができて、鳥が出て、最後に花が出てくる。こういう歴史をお話ししたいと思います。(図1)

○これは「ブライス・コレクション」から選んだ伊藤若冲の絵ですが、月と鳥と花、そし

て、風を感じさせる。日本人の美的感性を象徴しているものの中で月が一番古い。その次に風、そして鳥、最後に花になります。 (図 2)

○地球は 46 億年前に、隕石が衝突して大きくなっていきました。 (図 3)

○生まれたての地球は、今の姿とは似ても似つかない。真っ赤な火の玉として誕生したわけです。 (図 4)

○そこに火星ぐらいの大きさの天体が衝突しました。地球ができてから恐らく 5000 万年後のことではないかといわれています。 (図 5)

○本体同士は引っ付いてしまったのですが、周りに破片が飛び散ります。それが互いの引力で引き付け合って、わずか 1 カ月で月ができたろうといわれています。45 億 5000 万～45 億年前の出来事です。月は地球誕生から間もなくできたわけです。 (図 6)

○できたばかりの月と地球です。両方とも赤いのは、溶岩でおおわれているからです。今の溶岩から水蒸気とか二酸化炭素といったガスが出てきます。この時代にもたくさん出てきたのですが、月は小さくて重力が地球の 6 分の 1 しかないので、月の内部から出てきたガスは全部宇宙に飛んで逃げます。しかし、地球の場合は重力が大きいので、ガスをうまく閉じ込めることができたわけです。 (図 7)

○そして、今の大気の 100 倍、あるいは 150 倍ぐらいの密度の、主に水蒸気と二酸化炭素から成る大気ができました。火の玉として生まれた地球は、かすみの球になったわけです。水蒸気は冷えると水になりますが、当時、地球の表面は熱かったので雨となって降ることができなかった。しかし、隕石の衝突回数がうんと減ってきて、外側から熱が加わらないので、地球が冷えていって雨が降るようになります。 (図 8)

○雨が降ると、地表温度は当時 350℃ぐらいでしたから、すぐ水が蒸発して気化熱が奪われます。ですから、加速度的に地球が冷えていって、それが水蒸気を水に変えて雨が降るということで、何千年かかったのか分かりませんが、大気中の水蒸気がほとんど雨となっ

で降ってきて、最初の海が 44 億年ぐらい前にできます。(図 9)

○それまで地表は非常に熱くて、太陽から受けるエネルギーに比べると、地表温度の方がはるかに高くて、大気は渦を巻くような形で複雑な動きをしていました。しかし海ができると、最初は 250°C ぐらいの水温があったそうですが、だんだん冷えてきます。相対的に、太陽から受けるエネルギーの方が大きくなって、現在と同じような風が吹くようになっていきます。すなわち、熱帯が熱くて、極地方が冷たいので、熱帯で暖められた空気が上空に上がって冷やされて、両極地方に流れ込んでいく。(図 10)

○海の上に白い雲が浮かんでいる美しい景色は、風が生まれて初めてできた。こういう景色も実は 44 億年の歴史を持っているわけです。(図 11)

○花鳥風月の風月は、地球初期の話ですが、鳥と花は、それから 40 億年以上たってから出てきました。これはドイツのゾルンホーフエンという所の石切場から出てきた始祖鳥の化石です。羽毛の細かい所まで残っているのに、イギリスのノーベル賞学者が「これは捏造だ」と。こんなきれいなものが残っているはずがないから、これは偽物だといって論文を書いて物議を醸していたのです。(図 12)

○しかし捏造ではなくて、こういう復元図も描かれています。これが 1 億 5000 万年前、ジュラ紀です。「ジュラシック・パーク」という映画がありましたが、大型恐竜が陸上を闊歩している、あの時代に出てきました。(図 13)

○これは大きさが 1 m ぐらいの肉食の恐竜で、この骨格と今の鳥の骨格がよく似ています。ですから、鳥はジュラ紀の終わりに、小型の肉食恐竜から進化した。鳥の羽毛も、トカゲのうろこが変形したのだといわれています。中国からたくさん始祖鳥の時代の化石が出てきて、恐竜から鳥が出てきたことは、ほとんど間違いない。(図 14)

○ジュラ紀の終わり、ちょうど鳥が出てくるころの時代の風景を復元したものです。マツやスギのような針葉樹の森と、手前の方にソテツの類が描かれていますが、花を見ることはできません。この時代には、まだ花はなかったのです。(図 15)

○1億年前になると、モクレンの花の祖先が出てきます。植生もだいぶ変わってきたので、四つ脚の雷竜といわれるようなものから、後ろ脚で立って二足歩行できるカモノハシ竜が主になってきます。ティラノサウルスが活躍した時代はまた花の時代の幕開けでもあったのです。 (図16)

○実を結ぶ花は、蜜をためて昆虫をおびき寄せて、受粉を確実にさせる。付けた実は、鳥やほかの動物に食べてもらって、糞を地域にまき散らしてもらう。そういう形で効率良く生息地域を広げていくことができました。それまでのスギやイチョウは花粉を風で飛ばすだけです。花粉症の方にはお気の毒ですが、スギは2億年前から風で花粉を飛ばしていました。非常に効率の悪いやり方です。花は昆虫に蜜を吸わせて、できた実を鳥や哺乳類に食べさせて生息地域を広げた。自然界は食いつ食われつの熾烈な競争社会だと言いますが、共存共栄を図った方が結局は繁栄する、ということは数億年の生き物の歴史を見れば明らかです。 (図17)

○白亜紀から新生代にかけて、裸子植物の方が隆盛だった。当時の被子植物は大きくなれなかったからです。しかし5000万年前に地球の気候が温暖化して、現在よりも10℃以上気温が高かった。そこで、広葉樹が大木になることができ、針葉樹を圧倒していきます。そして、針葉樹を圧倒した後は枝を広げていきます。 (図18)

○上から見ると、全く枝が覆い尽くしている。樹冠といいます。木の上に別天地ができたわけです。 (図19)

○森は霊長類にとって天国でした。実がなっている。若芽、若葉が食べられる。餌場として絶好の場所だったわけです。 (図20)

○ゴリラも日中は地面に下りますが、寝るときは、余程のことがない限り、木の上に巣を作って寝ます。チンパンジーやニホンザルも木の上で寝ます。人間は地上で寝る数少ない霊長類だということになります。 (図21)

○木の上に住んだことによって、霊長類は大きく目の能力を発達させました。犬や猫など

は、顔の両側に目が付いているので非常に視野が広い。ところが霊長類は顔の前面にあります。視野は狭くなるが立体視できる。遠近感が測れるわけです。あの枝なら飛び付けるとか、この枝はちょっと無理だからもうちょっとこっちの枝にしよう、というふうに。イチロー選手は立体視がうまいのであれだけのヒットが打てるわけです。3500 万年前にわれわれの祖先が目を発達させてくれたおかげで、イチロー選手の活躍もあるということになります。

(図 2 2)

○普通の馬や牛などの頭蓋骨を見ると、目の所が空洞になっています。ところが真猿類(チンパンジーやニホンザル、人間など)の頭蓋骨を調べると、目玉がちょうど入るようなくぼみができています。これによって目玉がしっかり固定されたわけです。

(図 2 3)

○目玉がしっかり固定されたことによって、視細胞という光を感じる細胞が 1 点に集まりフォベアを形成します。すると、非常にシャープな画像を網膜の上に結ぶことができるわけです。

ほかの哺乳動物と原始的なサルは、ピンホールカメラのようにどこも全体的にぼやっとピントが合っているわけですが、われわれの目はレンズ付きカメラのように、1カ所しか焦点は合わないが、はっきり見えるという特徴を持っています。

(図 2 4)

○もう一つ、色彩感覚を発達させました。左側の図は、犬や猫が世界を見ている状態です。普通の動物は青と緑を識別する視覚を持っています。犬は色盲だといわれるように、単調な世界を見ているわけです。ところが真猿類は赤を感じる。三原色で分解する能力を得たわけです。同じ場面を 2 色分解で見た左と、3 色で分解して見た右では、全く見え方が違うわけです。赤で見えているのは若葉です。広葉樹などの葉っぱは、せんじ薬などに使えるようないろいろな物質を含んでいます。それが薬になるときもあれば、毒になるときもあるわけですが、若葉にはどんな植物でもそういう化学物質の含有量が少ない。われわれの祖先は雨期には実がなるので実を食べる。乾期になると実が落ちて葉っぱが出てくる。ですから、そういうものを食べないといけないので、古い葉と新しい葉を見分けることができるようになった。そして、花の色も楽しむことができるようになったわけです。

(図 2 5)

○今のは 3500 万年前の話ですが、これは 500 万年ぐらい前のアフリカの想像図です。このころ乾燥が進んで森が縮小していった。チンパンジーやゴリラは縮小する森にとどまったのですが、人間の祖先は草原に下りてきました。そして二足歩行をすることによって両手が空いて器用になっていくわけです。それで道具を作ったりする。

チンパンジーも、人間と同じように色を見えています。京都大学の霊長類研究所の松沢所長がエッセーに書いておられました。天才チンパンジーのアイちゃんと手をつないで犬山の田舎道を散歩していると、黄色い菜の花が咲いていた。松沢先生が「アイちゃん、見てごらん。きれいな景色だよ」と言ったら、アイちゃんが何と道端のタンポポをつまんで、「これでしょう」といって松沢先生にさしだした。「この黄色でしょう」と。チンパンジーもそういう能力を持っているのですが、残念ながら絵は描けない。アイちゃんに筆を持たせて絵の具をやると、好きな色をブラッシングする。けれど、線を止めることができない。一方、人間はきちんと止めて、丸は丸、直線は直線で描きます。

最終的に 20 万年前に現れたホモ・サピエンスという生き物はチンパンジーと同じ色彩感覚を持っているのですが、器用な手を持ったことによって、美というものを作り出すことができるようになったわけです。 (図 2 6)

○伊藤若冲のような画家が絵筆を持って花鳥風月を描く。その背景には、月と風という 40 億年以上前の出来事と鳥と花という数億年より新しい出来事が織り込まれている。その大きな流れの中で地球は美しくなってきた。すなわち、最初は真っ赤な火の玉であったのが、今や花は咲いている、鳥は飛んでいる、チョウは舞っている。こういう美しい世界になった。しかも最後に現れた人間が、美しい自然をもう一つ自分たちのものにして表現できる。こういう素晴らしい生き物になったということで、花鳥風月の地球史を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました (拍手)。 (図 2 7)

(川勝) どうも原田先生、ありがとうございました。地球 46 億年の歴史を 26 分でまとめていただきました。地球の歴史、生物の歴史、霊長類の歴史、そして霊長類が地上生活をすることによって視覚を発達させ、現在の人間の祖先が 20 万年ほど前に生まれ、人間だけが芸術を作る生物になったということでした。地球は美しい星になってきたのですが、美しいものを作ることのできる存在は人間だけだという、実に味のあるお話でした。どうもありがとうございました。



それでは、池坊先生、お願いいたします。

(池坊) ただ今ご紹介いただきました池坊です。先ほど冒頭のところで川勝先生に、21世紀、これからの環境観、新しい環境観をとらえるときに、茶の湯、あるいは生け花に代表されるような日本の伝統文化の中で人が考えてきたこと、あるいはしてきたことという視点が欠かせないということをお願いいたしました。生け花は茶の湯と並んで日本を代表する伝統文化とされておりますけれども、世界でも英訳されることなく、そのまま「生け花」と言うと、世界中の人が、中には実際に見たことのない方もいらっしゃるし、本でしかご存じない方もいらっしゃると思いますが、生け花としてそのまま受けとめ、受け入れられるようになっていきます。

世界においても生け花を普及させる組織もありまして、これは生け花インターナショナルというのですが、実はこの組織を作ったのがアメリカ人の女性なのです。日本の古来の伝統的な世界でありながら、その素晴らしさをまず感じて、これは日本だけにとどめておいてはいけない、世界中の人が日本の伝統文化の精神を知って、それをお互いの交流や理解につなげようではないかということで立ち上げた組織でして、そういう組織があって、今、世界中に8,500名程度の会員がいるといわれています。

その生け花なのですけれども、文献からさかのぼりますと、大体、五百有余年の歴史がございます。先ほど原田先生の地球の46億年をめぐる旅をしてきたところですので、500年というと本当にまだ若いなという、浅いなという感じがしてしまうのですが、何か地球上の物差し、スケールでいうと、人類が誕生したのもちょうど大みそかぐらいのレベルなのですよね。そこからさらに生け花としては500年ぐらいしか活動をしていないわけなのです。けれども、そこで花というものを一つのテーマにして、多くの方々が力をかけて一つの伝統を築いてきたわけです。

先ほど、人が花を美しいと思う気持ち、地球上の歴史からいくと、まず花が先にあって、そこから人があったわけですから、人が花を美しいと思う気持ちが芸術活動になったという話がありました。私たちは普通、花というと、美しさの象徴として、まず非常にシンボリックにとらえられるのではないかと。けれども、古典を読みますと、必ずしもそうではなかったわけです。例えば古事記や日本書紀の中で、花がどういうふうに表示されているか、記されているかということを見ても、例えば火の神様が焼け落ちて死んでしまう。そのときに、その焼け落ちてしまった魂を弔うために、花が咲いているときは花

でもって弔いなさいという記述があります。花というのは、死者の魂をお慰めする。そういうふうにも認識されていたようです。

それから、これは非常に有名なお話ですけれども、木花咲耶姫（このはなさくやひめ）と磐長姫（いわながひめ）のエピソードもございます。このときは、磐長姫というのが二人姉妹のお姉さんでして、磐長姫は名前のごとく非常に強い、永遠の命を持っている、けれども美しくはない。そして妹の木花咲耶姫は、美しいのだけれども非常にはかない命しか持っていないということで、磐長姫の強さ、堅牢さに対して、花というものがいつかは必ず枯れてしまう、はかない、滅びていくものだという認識の上で描かれているということが分かります。

ですから、昔は花といっても死者を慰めるすべであったり、あるいははかなさというものを表すものであったり、またそれと同時に、何かよみがえる、花というのは朽ちても、また次の春が来れば必ず咲くものですので、そこから新しいエネルギーを吹き込んでくれる。そういうふうにもとらえられていたようです。今でも病院にお見舞いに行ったりするときに、お花を持っていかれる方が多いのではないかと思います。それも、どうかあなたの持っているエネルギーを回復してください、花のようにまた回復して元気になってくださいという、そういう昔の名残のようなものともいわれているようです。

現在では、花といいますと美しさの象徴であり、まさしく「花も実もある」という言い方もしますし、「あの方は花のような人」だとか、「華がある」、それから「花道」という言葉もよく使われるのではないかと思います。

そのようにして、美しいものの、美しいという意味だと思えるのですけれども、では海外と日本で美しさをどういうふうにとらえているのか、美しいという気持ちはどこからきているのだろうかということ、ちょっと考えてみたいと思っております。

実は仕事でいろいろな国を旅しておりますが、美しさというのは、もちろん人が、例えば花があってもそれを美しいと思わなければ、美しさは発生しないわけで、そこにまずそれを美しいと思う人の心の動きがある。これはもう世界万国共通のことなのではないかと思えます。けれども、海外と日本を比較してみますと、その美しさのとらえ方、概念というものがかなり違っているのではないかと。そして、違うからこそ日本では生け花という一つの伝統文化として、生け花が発生して成立したのではないかと思うのです。

例えば海外に行ってお花屋さんをのぞきますと、お花さんはお花さんなわけですから、つまり、花しかないわけです。日本の花屋さんは、ではどうかといいますと、緑の葉っぱ

があったり、木があったり、それから、緑だけの青々とした葉っぱだけではなくて、秋になりますと紅葉したものもったり、ちょっと先が黄色くなったものもったりします。花というときに、日本人が思う花というのは、決して満開の姿形のきれいな花だけではなくて、その命のありとあらゆる状態、本当に命が変化していくそのすべての状態を花とみなして、それを大切に扱ってきたということが、花屋さんに売られている花だけを比較しても分かるのではないかという気がいたします。

海外では花しか売られていない。では、海外で売られている花はどんな花かといいますと、これは満開の花なのですね。海外に行きますと、バラも満開の状態で売る。ということは、すなわち今が一番良くなってはいけません。今が良かったら価値が出てくるわけです。けれども日本ですと、もちろん満開のバラもきれいなのですが、日本の生け花の美意識においては、満開の花よりもむしろつぼみの方に価値をおきます。それはどうしてかといいますと、つぼみの花は、今はまだ硬くて、決して100パーセントの美しさではないかもしれない。けれども、この花がもしあした開いたら、どんな美しさが見えるのだろう、どんなふうに変化するのだろう。そういうふうな、人に何か希望を与えさせる、何かを期待させる。そういう余地をはらんだところに、日本人は美しさを見いだしてきたことが考えられるわけです。

これは、例えば短歌や俳句でも、お月さまの歌が詠まれているときに、何もかかっていないお月さまよりは、雲が少しかかっていて、それが晴れたらどんなに美しいだろうと思う、その月を愛でるといふ気持ちと、かなり近いのではないかと思います。そのように、日本人が美ということを考えるときには、今というよりは、非常に長い時間軸の中で、過去に思いをはせたり、あるいは必ずやってくるであろうあした、あさって、未来に希望を抱いたり、そこに夢を持ったり、そういう長い時間軸の中で美しさを感じ取っていたのではないかという気がしております。

それと、日本で美しいというときは、必ず植物の育ってきた環境にも目を向けています。決してその花の色であるとか、形の面白さを美しいとは言っていないのですね。例えば、1本の曲がった草があるとします。それはどうして曲がっているか。今はお野菜なども全部規格品で真っすぐで、お花も実は真っすぐなものが多いのですけれども、生け花の世界では曲がった草花を非常に大切にします。それはどうしてかというと、雨や風に打たれながらも、陽の方へ向かって伸びようとする、そういう姿勢を日本人が評価して花に心を寄せてきたからです。ですから、日本人が美しいと感じるときには、必ずその植物が抱えて

きた環境、どういうふうにして育ってきたのか、周りはどのような風景で、どういう状態だったのか、雨が降ったのか、風が吹いたのか、そういうところにまで思いを寄せるというのが日本人の美であり、そこから芸術活動をしてきたのだなと考えられるのではないかと思います。

先ほど、人類だけが美を見いだして、芸術活動ができるのは人間だけだ、人類だけだというお話がございましたけれども、人がそれぞれ思う美が芸術活動になったときに、その芸術活動というものは、単立している独立した個々のものではなくて、人と人をつないでいきますし、人と社会をもつないでいきますし、そして、人と自然をつないでいきます。本当に自分だけ、人間だけではとらえられない、いろいろなものを内包して、いろいろなものつながりながら芸術活動が生まれていく。そう思いますと、生け花の歴史は、地球の歴史から見ると本当に浅くてたった500年なのですけれども、でも、それでも、きっと何かそれだけの意味があるのではないかと感じたりしております。

(川勝) 素晴らしいお話をありがとうございました(拍手)。生け花の技術ではなく、花の哲学とでもいうべき内容でした。花がもとは死者を弔う役割を果たしていた。木花咲耶姫のお話にございましたように、はかなさとともに、春を迎えれば新しい花が咲く、よみがえりの象徴。美という原田先生のキーコンセプトをお受けくださって、日本における美を実に美しく描き出してくださった。そして、芸術が人と人、人と社会、人と自然を結び付けるという役割を持っているところで結んでくださいました。

まさにそういう結びつける総合文化が茶の湯ではないかと思います。そこで、お待たせいたしました。熊倉先生にお願いしたいと存じます。

(熊倉) 熊倉です。私は研究というほど立派なものではありませんけれども、日本文化史を仕事にしております。日本人の古代から現代に至る文化の中にはいろいろな面白いことがあります。結局、自分で楽しませてもらうような、そんな仕事をしてまいりました。中でも茶の湯というのは非常に特異な文化でありますけれども、それなりに日本の文化史の中ではいろいろ契機になっておりますので、そんなことをしながら今日まで来ております。

ちょっと話が変わるのですが、今、池坊さんの話を伺っていて、死者を慰める花という一句に、思わず私はちょっと悲しいことを思い出してしまいました。実はこの8月17日に、全くこれはプライベートなことで、こんなところでお話しすることではないのです

が、私が15年と3カ月飼っておりました犬が亡くなりました。何とか、死ぬということ、われわれ人間でもそうですけれども、本当に亡くなっていく瞬間というものをなかなか目の当たりにすることが少なくなってきました。親の亡くなったときでも病院に任せていました。ところが、犬が最後は家族を全部呼び寄せるのです。目の前でだんだん弱っていく犬を見ながら、家族水入らず4人で犬を前にして食事をして、その数時間後に亡くなったのですが、だんだん顔が神々しくなってくるのです。もう本当に静かな目と、呼吸も全然乱れない静かな呼吸をして、最後はスポイトで水をやっていたのですが、そのスポイトの水も飲まない。もちろん1日前から食も断つ。もう何と申しますか、今死ぬぞという決意ですね。ああいう見事な死に方ができるというのは、僕は本当に人間より犬の方が立派だと、感動いたしました。

その犬が亡くなって、いろいろ調べましたら、そういう火葬場というのがあるのです。1カ月半ぐらい前に、京都は暑いものですから、河口湖の山小屋へ家内と犬は疎開しておりました。後から私も行ったのですけれども、大自然の中で死んでいくのを見ると、今更焼くというのは、何かものすごく不自然な感じがしたのです。あんなに自然の中で飛び跳ねていたのを焼いてしまう。これはもうたまらないと思ひまして、周りがもう山林ですから、どこを掘ってもいいものですから、私は穴を掘りまして、そして、下へ行ってできる限りたくさん花を買ってきて、花でその穴を全部うずめて、その中へ犬を置いて、みんなで弔ったわけです。その後、そこにお墓を作りましたら、何か一番自然な葬り方ができたかなと、家族でそれなりに納得した思いがございます。何か、生きた花を介在にして、生命が自然と和解していくというのでしょうか。このことがやはりとても大事なことで、つまり共生というのは、両方が生きるということですが、もう一歩進んで、自然と人間が和解していくという、こういうことが大事なのではないかという気がいたします。

その和解ということを哲学者がとりあげています。和解というのはキリスト教的な概念かもしれません。神と人間が和解する、その和解には仲介者がいるわけですね。その和解の仲介者がキリストであったという、そこから出発するのだと思いますが、自然と人間が和解するには仲介者が要るのです。その仲介者は何かということです。それは、その犬の死を見ておまして、今、池坊さんのお話を聞いて、花なのです。花が和解者なのです。花を介することによって、人間と自然、生命と自然が和解していく。これは、私はもう少し広く言えば、生け花であり、茶の湯もそうだと思いますけれども、さらに言えば川勝さんの言われた芸術なのです。その芸術というものを和解の仲介者として、こんな素晴

らしいものをわれわれは持っているのではないかと、そんなふうに感じました。

今日、私はいろいろなことを、何かとりとめのないお話をするばかりで、あまりまとまった意見を持っているわけではないのですが、皆さんのお手元に一つ資料をお配りしております。これは『南方録』というお茶の本の「覚書」というところの一節ですが、ちょっと読んでみます。

「紹鷗、わび茶の湯の心は新古今集の中、定家朝臣の歌に『見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ』、この歌の心にてこそあれと申されしとなり。花紅葉は、すなわち書院台子の結構にたとえたり。その花紅葉をつくづくと眺め来たりて見れば、無一物の境界、浦の苫屋なり。花紅葉を知らぬ人の、初めより苫屋には住まれぬぞ。眺め眺めてこそ、苫屋のさびすましたところは見立てたれ。これ、茶の本心なりといわれしなり。また宗易、今一首見出したりとて、常に二首を書き付け進ぜられしなり。同集家隆の歌に、『花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや』、これまた相加えて得心すべし。世上の人々、そこの山、かしこの森の花が、いついつ咲くべきかと明け暮れ外に求めて、かの花紅葉もわが心にあることを知らず、ただ目に見ゆる色ばかりを楽しむなり。山里は浦の苫屋も同然のさびた住まいなり。去年一とせの花も紅葉もことごとく雪がうずみつくして、何もなき山里になりて、さびすましたれば、浦の苫屋同意なり。さてまた、かの無一物の所より、おのずから感をもよおすようなる所作が、天然とはずれはずれにあるは、うずみつくしたる雪の、春に成りて陽気を迎え、雪間の所々にいかにも青やかなる草が、ほつほつと二葉三葉もえ出でたるごとく、力を加えずに真なる所のある道理にとられしなり」。

これは、何を私がここで言いたいかということ、一番大事な言いたいことは、「かの花紅葉もわが心にあることを知らず」ということなのですね。われわれは、自然というものが外にある、われわれの外にあるというふうに考えがちでありますけれども、利休は、そうではないと。花紅葉は実は自分の心の中にあるのだと、こういうふうに言っております。このことは非常に大事なことを意味しているのではないかと。私の解釈ですから、非常に勝手なことではありますが、つまり、その前の武野紹鷗が言ったことは、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」という定家の歌で茶の湯の心を示したと。花紅葉は外なのですね。ですから、花も紅葉もなくなってしまう。だけど、それが悲しい、寂しい、わびしいというだけではなくて、その悲しくて、寂しくて、わびしい中に美があるということ、武野紹鷗は言ったわけです。

ですから、先ほどの池坊さんのお話でも、花はつぼみが、まだ咲ききっていないつぼみも大事だ、咲ききってしおれていくその姿もまた大事だというふうにおっしゃったとおりでありまして、大体ここにいらっしゃる方の大半は、どちらかというとも枯れかけている方が多いかと思えますけれども、これがまた美しいわけでございます。そのような世界は一つあります。だけど、それはあくまで自分が見ている世界なのですね。自分の向こうに見える世界、利休はそれではいかんと言うのです。向こうに見えるものは仮りのもので、本物のつぼみも、満開の花も、枯れていく花も、実は自分の心の中にあるのだ、それを取り出して見ることができるのだと、こういうふうに言っております。「かの花紅葉もわが心にあることを知らず、ただ目に見ゆる色ばかりを楽しむなり」。われわれはどうしても外に目を向けてしまいます。どこの花がいつ咲くか。もうわれわれ桜の時期になりますと、桜前線などという新聞の報道があつて、いつどこで咲いたということがずっと出てくる。そんなことに夢中になってしまう。そうではないのだと。花は実は自分の心の中にあるのだと、こういうことを言うわけです。

そうすると、ここで何が問題になるか。その後なのですけれど、「花をのみ待つらん人に山里の」、つまり、今年はおそこの、どこの花盛りが見たい、吉野へ花を見に行こうとか、いろいろなことをわれわれは考えますけれども、そのように外に見つけるのではなくて、自分の心の中にある花なのだ。そうしたときに、本当の花というのは何か。全部、花紅葉もうずみつくした雪一色の世界、これが無一物です。もう何にもないのですね。真っ白、何も無い。だけど、その何も無いと思っているそこに、春になると自然に雪が少し溶けて、そしてぽっかりと黒い土が見えて、そのぽっかりと黒い土の中から、本当にわずかですが、青い緑の若葉が芽を出している。こんな素晴らしいことはないというわけです。これは人間の力を超えた、人知を超えた、人間の作為を超えた、いかなる技術をもってしてもできないような自然の力なのです。その自然の力が、人間がつくったどんな素晴らしい技術よりもすごい。その力が土の中から芽を出させているわけです。その驚異、そのことに対する恐れというものを感じたときに、そこにわびがある。それが茶の湯なのだ、こういうふうに利休は言っているわけです。

北原白秋の歌に、「薔薇の木に薔薇の花咲く。何事の不思議なけれど」という和歌がございます。薔薇の木に薔薇の花が咲いている、当たり前ですね。薔薇の木にチューリップでも咲いたらそれは不思議ですけれども、薔薇の木に薔薇の花が咲くのですから当たり前。だけど、それが当たり前だと思ってしまうたら、やはりわれわれは感性がどこかで鈍くな

っているのですね。薔薇の木に薔薇の花が咲いた。春になれば花が咲く。季節というものがめぐってきて、そこにわれわれが生かされているということの不思議さというものに気付いたときに、われわれは本当に自分が微小な、小さな存在であるということに気が付くわけですね。そこにわびというものがあるのだと。こういうふうに利休は言っています。

でも、それはもう少し考えてみると、われわれの自分の中にある自己と自然の和解ではないかと思うのです。これはなかなか難しいことで、私にはうまく言えませんが、われわれ人間の歴史は、自然をいかに支配するかということで今日来ているわけです。台風が来れば、台風に負けない技術をもって人間の生活を守る。雨が降れば、水があふれないように堤防を造る。すべて自然をわれわれが支配、自由にコントロールできるようにしてきたのが文明です。そのことをわれわれは決して悪いことだとは思っていないですね。そういうことをやってきたから、今日の歴史がある。だけど、そこにどう自然とわれわれの和解があるのかということです。

そうすると、同じことなのですね。われわれの、自分の心というものを考えてみると、われわれは自分の欲求だとか、衝動だとか、エロスだとか、いろいろなものを放棄できないわけです。そんなものに負かされていたら人間はいけないというふうに、僕たちは子供のときから教えられてきた。どうやって自分を矯正していくか、自分をコントロールするかということを教えられてきたわけです。だから、西洋人などは最もそれがきつい。セルフコントロール、自分をコントロールできる人間というのがすぐれた人間で、自分をコントロールできない人間は駄目な人間なのですね。そういうふうにわれわれは教えられてきた。

けれども、本当にそうなのだろうか。自分の中の心、自分というものをコントロールしなければいけない。それが自然の自分なのかということです。これは私は違うと思うのですね。それは理想です。理想ですけど、われわれが自分の心のままに動いたときに、それが人にも何の迷惑をかけない、人にも何の危険を与えない、そしてお互いに気持ちよく幸せに暮らせるような自分。セルフコントロールせずに、自分を抑えつせずに、自分の欲求のままに、自分の思うがままに生活することで、それが人々を幸せにし、自分が幸せになる。そういう人間像を、一方でわれわれはずっと求めてきているのです。

禅の中で、禅僧たちが最後に大閑（おおびま）、安閑という「閑」という字をよく使いますが、安閑たる境地というものは、自分を何しよう、自分をどういうふうに抑えよう、自分をどういうふうに人に合わせようというような、そういうことを一切持たない。自分が



思うままに、自分が生きたいように、自分が過ごしたいように、振る舞いたいように振る舞うことで、人々が幸せになり、自分が幸せになる。これが閑という境地なのですね。こういうふうなものは、私は、やはり宗教の世界では早くからみんなが気が付いて求めているものだと思います。

日本の場合で言うと、幕末から明治にかけて浄土真宗の教徒の中に「妙好人」という人びとが出てきます。妙好人という人たちは、何もそういうセルフコントロールを持たない人です。妙好というのは、南無妙法蓮華経の「妙」、好む、好き嫌いの「好」という字で妙好人です。この人たちは、すべてを仏様にまかせていますから、自分をコントロールする必要がない。思うように自分が過ごすことで、それが人々を幸せにし、自分が幸せになる。そういうことを理想にした人々がいるわけです。

そのような、つまり自分の心をコントロールし抑制するのではなくて、自分の心そのまま開放されるような、そのまま動かせるような、そういう自然の自分と和解するというのが、どうしたらできるのか。実は自分の中に、心の中に自然がある。その自然の自分を、どうやったらそのまま表現できるのか。こういうことが次の課題ではないかというような気がいたします。

自然と人間というのは、向こうに自然があって、こちらに人間がいるのではなくて、自分の中に自然があり、自然の中に自分がある。そういう和解ということが、やはり大事な一つのキーワードになるのではないかという気がするわけであります。ちょっと長くなりまして、すみません。

(川勝) これまた、まことに素晴らしいお話をちょうだいしました。15年間連れ添われた愛犬の大往生。やはり熊倉先生の感化を受けた犬ですね。火葬にはできず、土の中に埋めてお花を供えられた。そのエピソードから「和解」という大事なコンセプトを出してくださいました。どのように自然と人間が和解していくか。花が仲介者ではないかというお話でした。

このお話を受けて、光田さんが、『恋の隠し方』という本で、兼好法師の徒然草の新解釈を出されて、その主題についても書かれているのですが、ご本人が隠れてしまわれて、今日ここにいらっしゃいません。そこで3人の先生方にお話を承っていこうと思います。

池坊由紀先生と熊倉功夫先生のお話をお聞きになって、原田さん、感想かたがた述べていただきたいのですが、人間と自然との間に仲介するものに花があるということでした。

しかし、技術も仲介者ですね。先ほどの熊倉先生のお話ではありませんが、技術を媒介あるいは仲介にして、自然と和解するどころか、自然を破壊する方向に走ってきたわけですね。それは先生がご専門にされている、科学の歴史ではなかったかと思うのです。

なぜそうなったのでしょうか。前の職場の同僚に赤澤威先生というネアンデルタールの研究者がいらして、ネアンデルタール人の子供の骨を発見され、シリア地方の現場でのその子の弔い方が、きれいな景観の所に埋めて、たくさんのお花をまいて花で飾った。花で死者を弔ったという。恐らく地中の花粉分析で分かったのだと思います。死者と生者を花でつないだネアンデルタール人は、われわれの直接の祖先ではありませんが、霊長類の一つとしてそういうことをしていたという。

それなのに、なぜわれわれ人類は自然を破壊する方向に行ってしまったのか。同じ科学者として、原田先生、あなたはそれをどう思われるのか。科学は世界共通語ですが、原田憲一先生は、地球の歴史をビジュアルに花鳥風月の反対の「月風鳥花」の歴史として論ずるという大変ユニークで面白く、花鳥風月でいえば、地球史の最後は花ということでしたが、どうして自然との関係が和解と反対の方向に行ってしまったのか。その辺を、科学者としての自己批判も含めて話していただけますか。

(原田) 川勝先生も今西先生に心酔しておられるようですが、今西先生が「もう科学者をやめる。自然学をやる。」とおっしゃった。けれども当時、先生の真意をほとんどの人が理解できなくて、今西さんは狂ったのではないか、科学をやらずして自然が分かるのかと怪しんだ。本当は、「何で日本人が西洋人の見方、考え方で自然を理解せないかんのか。そんな方法に縛られるのは嫌だ。もっと自分の感性、自分の目と頭を信用して自然を理解するのだ」と、おっしゃったわけです。

今の科学は西洋人の科学です。技術は250万年前からあった。石器が250万年前から出ているからです。人間は250万年前から積極的に自然に働きかけて、技術を使ってよりよい生活を求めていた。ところが、科学は非常に新しい。お花に比べると少し長いのですが、わずか5000年の歴史です。なぜかというと、5000年前に文字と数字が発明されたからです。文字と数字ができて初めて、それまで「1、2、3、たくさん」としか言えなかったのが、牛50頭とか羊30頭とか、定量的に話せるようになった。それから、知識をきちんと整理して書けるようになった。つまり、自分の知識を外部化して、冷静に眺めることができるようになった。技術を発達させるためには自然をよく知らなければいけないわけで

す。その自然理解が科学です。だから、エジプトにはエジプト人の科学があったわけです。ギリシャ人にはギリシャの科学があった。中国にも日本にもある。ところが、われわれが科学と呼んでいる西洋科学は新参者です。17世紀に出てきたからです。

西洋科学にもいいところがたくさんあります。実験をする、結果を数式化するということで、技術に転用しやすい。例えば今西先生が、生物はすみ分けをして仲良くやっているのだと言っても、これを技術的にどう使うかとなるとかなり難しい。ところが、水は100℃になったら沸騰する。だから蒸気を作るにはどうしたらいいかという話になる。西洋科学は技術的に使いやすいので、電球がついたり、汽車を走らせたり、いろいろなことができる。しかし、大前提となる自然観は日本人のものと大きく違うわけです。

熊倉先生からお話があったように、日本人は自然を良いものだと考えている。だから、自然と一体化することが一つの理想の姿です。山居、いおりを構えて、心の赴くままに自然と融合していく。自然はあくまでも善なのです。ところがヨーロッパでは、キリスト教が大きな影響力を持っているので、自然は悪魔の住処です。人間が手を加えない限りは、神様がパーフェクトに作ったにもかかわらず悪魔の邪悪な力が働いている。だから、自然は人間に征服されて初めて自然になる、本性を回復するのだ、と。

例えば、川は蛇行している。日本人は情緒があっていいと思うのですが、19世紀のヨーロッパ人はどう考えたか。川は山から海に水を流す水路である。それが曲がっているのは、悪魔が邪悪な力で川の本質をねじ曲げたのだ、と。そこで、ライン川を一生懸命真っすぐにして自然を矯正したと言った。それでどうなったかという、氾濫が起こったのです。日本の川と違って、標高差が小さいので、ゆっくり流れてくる。アルプスの雪解け水が、本来だったら蛇行によってゆっくり水位を上げながら流れてくるのに、自然を矯正したために一気に流れるようになって、洪水が増えてしまった。こういうことが分かるまで、やはり50~100年かかるのです。今はドイツ人も遊水池を造ったり、洪水が起きたときに水没してもいいような公園を造っています。ようやく、自然に手を加えればいいのだという発想がどうも違っていたらしいぞというところに気が付いた。

私も昔は西洋科学一辺倒でやっていて、随分反省しなければいけないところもあるので、今は今西先生と同じように自然学をやりたいと思っています。

(川勝) 分かりやすくお話いただき、ありがとうございました。科学自体ではなくて、自然観が問題なのですね。科学が基づいている自然に対する見方、これは今回のテーマで

ある環境観とも言い換えられます。17世紀のヨーロッパの科学革命の背景にある自然観、環境観に問題がある。それに日本の学者の今西錦司さんが気付いた。今西さんは自然科学者として文化勲章をもらわれた後、「わしは自然科学を廃業する。」と言われたのですが、今おっしゃったように、学問をやめられたのではない。自然を実験対象とは見ないで、自分がその中に入って、自然の中で自然を認識するという立場ですね。

今西さんはカゲロウの研究をして学位をとられたのですが、カゲロウというのは羽化すると物を食わず、ダンスを踊って、好きな相手を見つけ、子供を産んで死ぬ。そういうカゲロウの幼虫の研究をされていた。生物学者にとっては、新種の発見が功績になるわけです。しかし、珍しい生物を取って標本にしたとき、死物になっている。それは生物学ではなく死物学だ。死物学を止めて、自分も自然の中に入る、主観と客観を分けない。主客一体が自然学です。先ほど熊倉先生が、花紅葉が自分の心の中にあると。花紅葉が、武野紹鷗が外にあると見ていたのを心の中に入れるという、そういう転換が、日本の自然観を文化にした茶の湯の一番の基礎だと、力を込めて言われました。それは熊倉先生ご自身の自然観だとも思いますが、そういう500年ほど前に日本が作り上げた態度というか、そこに今西さんは返られた。そして原田先生自身も今は同じ立場にいられるのだと思います。

さて、先ほど由紀先生が500年ほど前にお花の理論ですか、形ができたと言われましたが、お話の中身は古い記紀の時代から説き起こされました。一体どのような経緯で、生け花としてわれわれが知っているものになったのか。池坊のお花のスタイルになるまでの経緯があると思うのですが、そのあたり少しつないでくださいませんか。また、両先生の話もお聞きになられた感想もまじえていただければと思います。

(池坊) 先ほど、日本人にとっては自然が非常に近い、いいことで、西洋の人にとっては悪魔のすみかというお話がございましたけれど、私たちも本当に自然とか不自然という言葉が普通に使っていると思うのですね。例えば、「あの人の洋服の着こなしは自然だ。」

「あの俳優さんの演技は自然だ。」と言うときは、それはいいという意味で使っていますし、「あの人の洋服の着こなし、不自然だよね。」と言ったら、それはやはり良くないこと、「あの俳優さんの演技は不自然ね。」と言うときは、あまりいいという意味では使いませんので、もう私たちのこの日本人のDNAの中に自然と、それこそ自然と、「自然はいいことである」という意識というか概念がインプットされているのかなと、実は今思ったのです。

先ほど自然という、自分の心の中に自然がある、自然を見いだすというお話がございま

した。では、生け花が今までにどういうふうな経緯をたどってきたかということなのですから、まずは「依代（よりしろ）信仰」というものが非常に深く関係しております。昔から人というのは、大きな木であるとか、岩であるとか、そういう自然の大きなもの、対象物に対して神仏が宿るといって、非常に敬虔な、自分を一步下がってみる、そのようなところがございました。仏教が伝来しまして、仏前供花のときに、人がいろいろな願い事を込めてそのお花をささげていたという記録が残っています。日本で一番古い『花王以来の花伝書』という伝書があるのですが、それを見ますと、お花の生け方も書いてあるのですが、この枝をさすときは、例えば自分の主君がちゃんと無事でありますようにとか、国が安泰でありますようにとか、そういういろいろな願い事を込めて花を立てていた。ですから、本当に昔から人が花を単なる物として見ていたのではなくて、自分の心を託すのに一番ふさわしい、一番自分の気持ちに近い存在としてとらえていたということが分かると思います。

それから、例えば「花合わせ」といって、花同士を競い合ったり、花がさされている器同士を觀賞し合ったりする、そういう時代もありましたけれども、非常に大きな生け花の発展のターニングポイントになったのは、やはり書院造りができた、床の間という空間ができたということではないかと思えます。きっと床の間のことは、私よりも熊倉先生の方がお詳しいと思えますけれども、その中で座敷飾りということがあって、それまでただ単に何も制約のない中で花を見ていたのが、では、一つの限られた空間の中で、掛け軸があったり、ろうそくがあったり、お香があったり、そういうほかとの関係性の中で花をどういうふうにしてとらえていくべきだろうか。そして、そこにいらっしゃる人、いらっしゃる人の時間といったいろいろな複合的な要素があって、花というものが祈りの花だったものが、その祈りに付け加えて、より芸術的に、より美的に進化を遂げてきたというのが、とても大きなことではないかと理解しています。

先ほどいろいろな状況、いろいろな過程において美があるという話をいたしましたけれども、実はそれを説いた人が、1540年代ぐらいに活躍した池坊専応という人です。代々、池坊の家元は「専」という字が付いていまして、この人が『専応口伝』を表したことによって、生け花の哲学が確立したとされています。

では、専応はどういうことを説いたかということ、これはお茶の世界でも、村田珠光とか、利休とか、いろいろな革新的な方が出て、それによって新しい概念が作られたということともきっと関係していると思えます。専応は、それまでの生け花の形、すなわち高価な器

に美しい花をさして、それをお互いに競い合って、どちらがいいとか、どちらが良くないといった、世俗的な価値観によって判断されていた美の基準というものを全く否定したわけです。そして、そういった金銭に置き換えられるような世俗的な価値観ではなくて、すべての命あるもの、それこそつぼみから満開の花、そして、先枯れの葉っぱ、枯れたものまで、すべてのあらゆる姿は、その命の営みであって、どちらがどうと比べるべきものでもないし、それぞれが美しいというふうに考えて、「枯れた花にも花がある」という一言で表現しています。

枯れた花にも華があるというのは、私は、それまでの価値観をも壊すような、きっとその当時の人からしてみれば、もうびっくりする、とんでもない言葉だったのではないかと思います。そのことによってあらためて花を生ける、命を生かすということはどういうことなのか、すなわち日本においては、表面的な美しさだけではなくて、命を丸ごと受けとめて、命を尊重していくというのが生け花であるというふうに、そのときから理論付けられて現代に至っているのではないかと思います。

先ほど技術という話もちよっとありましたけれど、生け花も伝統的な世界なのですが、本当に技術の恩恵をすごく受けているところだと思うのですね。例えば今一番難しい、手に入れにくい花材は何かというと、それが松であったり、昔はよく河原で咲いていた雑草であったり、ああいうものを手に入れようとすると、非常に難しい、困難が伴います。今は世界中のいろいろな所から花材が、花屋さんに行きますとお花が輸入されていて、そして、そこに並んでいる花はどういう花かということ、自然の花ではなくて、バイオ技術によってたくさんの品種、たくさんの色、たくさんの今までなかった形が生まれています。それから、そのことによって、また生け花の表現もとても奥深く、広がっている。ですから、文化の世界というのも、同じように昔からのことをやっているのではなくて、本当に科学技術の恩恵も受けながら、その一方で、自然がなくなっていることによって、昔できたことができないという現実もあるのですけれども、技術と共存しながら生け花ということを考えないと、やっていけない時代に来ているのかなと考えています。

(川勝) どうもありがとうございました。先ほどの話で、すべてのプロセスに命があり、その背景には一番最初に花が神の依代とかかわっていたということでした。大きな樹木に神が降り立つ、そういう依代という考え。そういえば、「花を立てる」と言いますね。「花を生ける」とも言いますが、天に向かって屹立する樹木と、花を立てるというのと、何

か関係しますか。

(池坊) そうですね、祇園祭の鉾のところの依代もそうですけれども、やはり立ったものに神様や仏様が降り立ってこられ、つかれるわけですよ。ですから、それは寝てはいけないわけですね。

(川勝) なるほど、なるほど。

(池坊) ですから、池坊の一番古い形、仏前供花の形のことを「立花」と言いますが、立つ花、立てる花なわけです。ですから、いろいろな古文書を見ていますと、例えば秀吉が来たときに池坊専好が花を立てたり、またある所にはそのときの家元が宮中で花を立てると書いてありますけれども、立てるという表現があるということは、このとき生けられた花は立花であるということが分かるわけです。

(川勝) ありがとうございます。そういえば、道長の子の頼通の次男の橘某の作といわれる『作庭記』には、石を立てるには石の乞わんに従えとあります。石を「置く」と言わないで「立てる」と言っています。そのような言い方の前提に、自然の樹木や岩石などいろいろなものに神が降り立たれるという日本人の観念があって、そうした態度のゆえに、自然に対して、由紀先生の表現によれば、人は敬虔になる。満開のきれいな花だけではなくて、枯れた花にも華があり、花の生涯のすべてのプロセスに命があるという、そういう哲学になる。これは、やはり自然観に帰するように思います。

お茶ですと、茶の湯は千利休で確立しますが、16世紀の末から17世紀にかけて、先ほどの原田先生のお話によれば、ヨーロッパでは自然を征服する技術、科学が確立しました。日本では自然を心の内に取り込む、あるいは自然を生かすというか、一体感がある芸術としての茶の湯が確立します。

そこで、熊倉先生には、茶の湯を比較文化論的な観点からお話していただきたい。ヨーロッパにおける科学技術の成立過程と、日本における生活の芸術化、そこには技術も入ってくるわけですが、しかし日本の技術は、芸術的な技術と言ったらいいのか、用と美が一体になっている技術だと思うのですが、その辺、比較文化論的な観点からいかがでしょうか。

(熊倉) いや、むしろそれは川勝さんがお話しになった方がいいのではないかと思いますけれども、今おっしゃった中でちょっと思いますのは、自然をどういうふうに取り込むかという、取り込み方ですね。ですから、ちょうどヨーロッパでも庭園が発達する、日本でも庭園が発達する。ここに、もしかすると日本の庭園がヨーロッパに影響を与えたのではないかというのが川勝さんの一つの仮説で、われわれはびっくりしたのですが、確かにそういう可能性も含めて、庭園というものの一つの大きな時代が来る。

そのときに、どうでしょう、日本の庭園が自然で向こうの庭園は人工的だというのは、これは完全に間違いですね。日本の庭園は決して自然ではないです。これは非常に人工的なものです。先ほどのお花もそうだと思うのです。お花を生けるということも、これは大変人工的なことだと思うのです。お茶も人工的なものです。あれは自然の姿だなんて、大うそだと思います。あんな格好をつけて、こんなことをやってお茶をたてて何が自然だと。自然にやれば、もう技など必要はないではないかと、こういうのが当たり前です。わざわざあんな大げさな格好をして、あれを西洋の人が見たら、踊りを踊っているみたいだと思うわけですね。そんな踊りを踊ってお茶をたてなくたっていいだろうと、こういうふうになるわけですが、それはそうなのです。それは自然観が違うわけです。ですから、日本人が西洋のような自然を征服し、西洋のような使い方をしなかなただけで、やはり日本人も自然を人工的に自分の好みに変えているのだと思います。

そういう意味で、どのような接触の仕方をしているか。そこら辺の違いが、先ほどからのお話の中の一つのポイントになってきていて、依代という今の池坊さんのお話は非常に象徴的だと思うのです。神を人という、神を介在して、自然と人間がいつも和解している、今日は和解の話ばかりですみません、和解する。つまり、何かを介在させることによって、われわれは自分なりの自然の取り込み方をするわけですね。ですから、本当に自然の生活に入りたいと思えば、山の中に入っていった方がいいわけです。山の中で原始古代の生活ができれば一番いいのでしょうけれども、そんなわけにいかない。山の中の自然を満喫して、自然の中で生活するというのは理想ですけども、皆さんみたいにお忙しい方がいちいち山の中へ行って、また帰ってきてすぐお仕事というわけにいかない。そうするとどうするかというと、仕事場の方に自然を持ってきてしまうわけですね。ですから、普段生活している、車馬雑踏する街の真ん中に自然を作ってしまう。これが茶の湯です。ですから、茶の湯の理想は「市中の山居」と言うのですね。市中なのです。街の中になればいけな



いのです。街の中にあって、山住まいである。

ですから、そこへ入るときは、何も剃髪してお坊さんになって、そこで読経して写経して、自然とともに暮らすということはできないわけです。そんないちいちできませんので、4時間だけお坊さんになるのです。これが茶会です。4時間だけ脱俗、遁世をするわけです。ですから、お茶をやっているときだけは、本当を言うとみんなあれは俗人ではないのです。お茶をやっている瞬間、その時間だけは世俗を離れていないといけません。だから、お茶の席では話していけない話題というものがああります。「神、仏、天下の戦、婿、舅、隣の宝、人の良し悪し」というのですが、これさえあればいくらかでも酒が飲めるというものでしょう。そういう酒の肴になるような話をしてはいけません。政治の話、宗教の話、人の財産の話、家族の愚痴、それから人の良し悪しですからゴシップ、こういうことは茶の湯の世界では話してはいけません。それはなぜかというと、4時間だけは世俗を離れているという約束なのです。これは非常に不自然ですけど、その不自然の形でわれわれ自然を自分のものになっているわけですね。

では、どのようふうにしたらそういう4時間の生活に入ることができるか。こうやっておしゃべりしていて、そのままずっと茶会に入るわけにいかんのです。やはり人間の心を切り替えて、そこに一つの関門を越えなければ入っていくことができない。そういうことで利休は約束を作るわけですね。それは何かというと、浄化するわけです。われわれの体を浄化していく。心身を浄化することによって、その茶室に入る資格が生まれてくるわけです。

その浄化する過程には、もういろいろなことがあるのですが、一番大事なことは、手水（ちょうず）を使う。水で清める。心身を清める。これは大事なのです。だから、皆さんも神社仏閣に行ったら必ず参詣する前に、脇に手水鉢というのがあるのです。あそこで手水を使わないで中に入っていくのはいけないのです。あそこを皆さん大体素通りしますよね。あんな所で手を洗ったらかえって汚いのではないかと、あんな水を飲んだら何かばい菌が入っているのではないかと、そう思いますけれども、衛生の問題ではない。あそこで手水を使うことでわれわれの心身を清めないと、われわれの体にくっついた汚れと一緒に境内に入っていくってしまうわけですね。そうすると境内が汚れてしまう。これがいけないのです。ですから、そうやってわれわれ日本人は常に清める。清めることによって神に近づいていくわけです。神の世界に近づいていくわけです。

そういう中で、依代というのはまさにそうなのですが、山中というのは依代の山の中な

のです。山というのは一番の依代です。富士山などは最高の依代ですね。高い山、すつくと立っているような山はみんな依代です。白山もそうです。筑波山もそうです。みんな、ひゅつと立っている。すつくと立っている。立つということが非常に、これはやはり美意識なのですね。立つ、立てるということが美ですから、神社など行くと鳥居の前に砂を三角形に盛っていますね。あれは「砂を立てる」というのです。あるいは、皆さんが料理屋など行きますと、最近では料理屋の店先に塩をちょっと立ててある。あれは立て塩、塩を立てるといいます。そのように、塩を立てる、砂を立てる、山を立てるということによって、神を常にわれわれの周りにお招きして、そして神人共食する。それは一つの浄化していくことなのです。

そういうことを日本人は美意識、価値というだけではない、美だと思ったのですね。ですから、立てるということから「伊達」という言葉ができます。例えば川勝先生みたいなのが伊達ですけれども、伊達というのは本来立っている、すつくと立っている男前というのが伊達なのですね。そういうふうな伊達という美意識になっていくような、神と人とのつながりの中で、自然をやはりわれわれは、われわれなりの好みで変形しているということです。そのことはやはり、何も西洋だけが変形しているのではなくて、日本人も変形している。変形するその根拠が違う。そこら辺が大きな問題なのだろうと思います。

(川勝) 面白いですね。聞きほれました。先ほど熊倉先生が、イギリスへの日本の庭の影響があったといわれました。これは私の仮説です。イギリスの庭は景観式庭園、風景式庭園です。それは、フランスのベルサイユ宮殿の庭や、イスラムの影響を受けたスペインのアルハンブラ宮殿の庭は左右対称で、幾何学式庭園といわれますが、それとは違います。景観式庭園は1730年代に突然イギリスに出てきました。その背景に日本の影響があるというのが私の説です。

江戸時代に日本を観察したケンペルのドイツ語の記録が英訳されたのが1727年、それがすぐに再版されイギリス人に広まります。それと同時に、イギリス人はそれまでコーヒーを飲んでいましたが、1730年ぐらいから急にコーヒーハウスがイギリスから消えました。本当に突然なのですが、ティーに切り替わる。イギリス人と言えばアフタヌーンティーというイメージもございますくらい、ティーとの結びつきは深いのですが、ティーが本当に突然に出てくるのです。それと、景観式庭園と一緒に出てくる。茶の湯に不可欠なのはお庭ですね。待合から露地を抜けて茶室に入る。露地が拡大されて回遊式庭園になりますが、

そういうものをケンペルが見ている。自然の景観の中で、茶の作法にのっとった形で歓待される。それを彼は書いているわけですね。それがイギリスに入ったのだということを申し上げて、熊倉先生は反対されない。特段の賛成もされませんが、これはまだ十分に論証されていないということなのです。

日本の庭は「市中の山居」、まさに自然を市中の生活の中に取り込んだ、そういう意味で人工的ですが、まさに自然を取り込むというところに日本の自然観が表れている。それは好みだとおっしゃったのがいいですね。人の好みはさまざまなので、対立するほどのことではない。和解は、人と自然との和解、あるいは死者との和解と、いろいろございましょうが、和解という言葉を活用すれば、西洋の自然観と日本の自然観を対立的にとらえないで、何とかその両者が和解できないものか、そして、どちらかといえばまだマイナーというか、よく理解されていない日本人の培った自然観、これはもちろんその背景に中国とか、インドとか、東洋のいろいろな知恵が結晶化されているので、そうした知恵をこれから生かすという意味で、西洋と東洋との自然観の融和をはかることが求められているのではないのでしょうか。

どれぐらいわれわれの自然観や環境観をこれから生かしていけるのか、実際には、もうそのお話をされているのですが、特に由紀先生がおっしゃっていましたが、枯れた花も花だと、あるいは花ではない草や枝も、全部命の一つの表現として、そのプロセスとして見て、どれもが尊いと言われました。お能に『風姿花伝』という世阿弥の書がありますが、その中で時分の花、つまり一番華やかなときの、今の由紀さんみたいな若いときの花。そして、枯れた花も花だと言っていて、熊倉先生も喜んでいらっしやって、私も還暦を迎え、原田さんもそういう感じなので、人生すべて、どのときにも花があるというメッセージはありがたい。そのことを「まことの花」と『風姿花伝』に述べられています。「まことの花」を得るにはもちろん修業しなければいけないということが合わさっているわけですが、そういう日本の自然観とヨーロッパの自然観・環境観を、特に日本の自然観を上手に融合していくのに、どのような手だてがあるのでしょうか。われわれが世界に発信する、その手だて、ないし知恵を、原田先生の方から、できればそういう未来志向的なご発言をいただきたいと思います。

(原田) 今、自然との和解とおっしゃったが、日本の神社は恐らくそうだと思いますね。日本は非常に災害が多い。火山噴火があつたり、津波が来たり、洪水があつたり、雪解け

があったり。そして、われわれは神を自然の怒りとして感じ、存在を認識するわけです。一方で、災害があるからこそ豊かな恵みがある。「エジプトはナイルのたまもの」といわれるように、ナイル川が定期的に氾濫して上流から砂を持ってきてくれるわけです。日本の水田も、洪水のたまものです。京都は鴨川がよく氾濫して、後白河法皇が比叡山の僧兵とさいころの目と鴨川の洪水だけはどうもならんとおっしゃっています。けれども、賀茂なすなど、いわゆる京野菜の産地は洪水多発地帯に並んでいる。九条ねぎもそうですし淀大根もそうです。災害は災難ですが、一方で恵みのもとなので、災害がないと困ることも多いのです。

三陸は津波でよくやられています、漁師さんに言わせると、「大きな津波は困るが、小さな津波は来てもらった方がいいのだ」と。「どうしてですか」と聞いたら、三陸はリアス式の深い湾になっていて、いかだで養殖していると海底に、ヘドロがたまっていく。普通の波だと海底の水は動かないからです。津波が来ると海水全体が動くので、湾の奥までわあっと水が来て、引いていくときにヘドロを全部運び出してくれるのです。しかし、いかだをつなぐロープの遊びが1mぐらいしかないのです、それ以上大きな津波だと、いかだが流されて損害が出る。けれども、70cmぐらいの津波だと、海底がきれいになる。

奥尻島が北海道南西沖地震で随分「やられた」と言っています。こんなところで言うていいのかわかりませんが、町長さんに聞いたら、「いや、あれから磯焼けは全部消えて、ワカメ、コンブが吹き出してきて。アワビとサザエが腐るほどわき出てきて、笑いが止まらん。だけど、それを言うと補助金がなくなるので、年中東京に行って、まだ復興できん、まだ復興できんと訴え続けているんだ」とおっしゃっていました（笑）。確かに津波で人的被害もでるけれども、その後は恵みが多い、ということは経験的に分かっているわけです。

それからもう一つ、自然災害のいいところといったらおかしいのですが、恨む相手が無い。だから、人々がすごく仲良くなれる。山形に住んでいた時、大雪が降るまでは近所と親しくなるきっかけがなかった。しかし、何十年ぶりかのドカ雪が降ったときには、みんな雪かきをしないと仕方がない。すると、やはり仲良くなるのです。災害は神の怒りだけに、それによって集落が団結したり仲良くなる。過去のいさかいを水に流して、また頑張ろうというふうになる。このように、災害のとらえ方がヨーロッパと違う気がするのです。自然は恐ろしいものである。と同時に、恵みを与えてくれる。だから、自然の恵みと怒りを常に考えながら付き合っていこうと。

川勝さんがおっしゃっていたように、昔は地球を地球儀でなくて世界地図で見ている。今や地球儀で見ないといけない。地球は動いているからです。いろいろな動きがあることがヨーロッパの学者にも分かってきた。そういう動的な自然とどう付き合ったらいいかといったときに、日本人は大きなノウハウを持っている。ですから、これから自然の見方がグローブ化していったときに、地球は生き物のように鼓動しているし、常に変遷しているのだということが明白になっていく。それに対して人間はどう生きていったらいいのか。一つのモデルを日本の神社とか祭りとか、そういう形で広げていくことができるのではないか。まだ思い付きの段階ですが、そう考えています。

(川勝) どうもありがとうございました。「天災は忘れたころにやってくる」というのは、物理学者で文人でもあった寺田寅彦の名言ですが、災害を通して、自然に対して敬虔にならなさいという教えだと思うのです。しかし、日本は一方で、ヨーロッパ起源の科学技術を、多くのノーベル賞科学者を出しているぐらい、たくさんの科学者・技術者がいて、国づくりではアメリカ以上にたくさんのセメントを使い、人工的な建造物を造っています。われわれの科学技術の使い方は、ひょっとするとわれわれが今議論したり、先生方に紹介していただいたような自然観とは違って、西洋流の自然をコントロールしていく方に偏しているのではないかとさえ思います。

熊本県の知事さんがダム建設に対して留保するとおっしゃいました。例えばダムとか、テトラポットとかについても原田先生は提言されていますが、似たような問題は韓半島でも、中国でも起こっており、これら近隣諸国でも、科学技術が発展していくとともに、そのしっぺ返しも受けています。そうした中で日本がどうするか。効果的に日本の環境観、自然観を生かした形で、どこに力点を置けばいいのか、例えばダムについて、先生が考えられていることがあれば、付言していただければありがたいのですが。

(原田) 今、ダムとおっしゃいましたが、日本のコンクリートは50年もたないのです。今、日本から砂が消えていて足りなくなっている状態です。スカンジナビアだと氷河が全部削った後なので川には石ころがない。ところが、土砂が流れ込む日本では、もう8割埋まってしまったダムや、6割以上埋まったダムがいっぱいある。これをどうするか。地質学の専門家に聞いて回っているのですが、どうしたらいいのか、誰も名案がない。

一方は、海岸侵食が進んで、海岸が全部テトラポットで埋まっていく。あれにも砂を使っ

ているので、砂浜が消えて稚魚が育つ海浜が年々なくなっている。

わずか50年で自然から大きなしっぺ返しを食らっている。ニュージーランドも同じで、100年前に牧草地を造ってイギリスに羊の肉を売ってもうけたのに、今は浸食がひどい。50～100年たたないと、自然を征服したといった喜びにどんな反応が出てくるのか分からない。ところが、日本は比較的それが早く出てくる。これから、日本人の失敗と従来 of 治水を見直す。そして、近隣諸国およびヨーロッパに対して、自分たちはこういう失敗をした、こんな自然のしっぺ返しがあったということを、事例を挙げて説明することが重要ではないかと思います。

(川勝) どうもありがとうございました。由紀先生はどうですか。

(池坊) はい、その前に、先ほど熊倉先生が自然とのかかわり方、自分たちのちょうどいい、都合良く自然というものを解釈してというお話がありましたけれども、私も生け花をしていて、本当に文化は虚構だなと思うのです。虚構でなければ文化にならないわけで、生け花もよく自然をそのまま生けているように思われています。中には生け花の作品を見て、例えばコスモスを生けているとしますと、「きれいなコスモスですね」とおっしゃる方がいるのですけれども、お花を生ける者にとっては「きれいなコスモスですね」と言われることは、あまりうれしいことではないのです。きれいなコスモスを選んで生けているので、きれいなのは当たり前であって、そうではなくて、例えばその作品を見たときに、それこそ自分の幼少時代の思い出であるとか、あるいは自分のこれからまだ見ない未来のことをイメージさせるとか、何か違ったものを連想させる、イメージーションをかき立てるのが、いい本当の生け花であるのです。その素材の良さだけを褒められたり、なかには器だけを褒められる方もいらっしゃるのです。本当に虚構の中で、でも、それをあたかも虚構でないふりをして、自然っぽくその中に潤いを持たせるかという、それがまた日本人の美意識の一つなのではないかと思ったのです。

先ほど川勝先生から、日本の独自の自然観をどのようにして日本以外のいろいろな国に発信していくのかというお話、テーマ、問題提起がありましたけれども、一番分かりやすいのは、やはり美であり、文化という切り口ではないかと思っております。原田先生からも、先ほど神社や祭りなどに代表されるという言葉もありましたけれど、やはり科学技術にない多様性や独自性というものを文化が持っている。それはもちろん例えば日本の生け

花や茶の湯もそうなのですが、それだけではなくて、例えばまちづくり一つを考えても、そのまちづくりで、どんなまちにしていくのか、例えば防災だったらどんなふう自然から人を守っていくのか、どんな建物を造っていくのか、どんな景観にするのか。それでも人と自然との付き合い方や考え方が出ているし、その選択において、日本人の美意識や、そこの地域に住む人の感性が非常に表れていると思うのです。

ですから、本当に発信するというのは大切なのですが、それより以前に、まず私たちがそれぞれ自分たちの、日本人の自然観というものを、はるか昔からどういうふうにかかわってきたのかということをもう一回掘り起こして再認識していく。そして、それをまた美とか文化という切り口で新たに説いていくということも必要なのではないかというふうに思いました。

(川勝) 全く同感です。熊倉先生にマイクをお回しする前に、私も同じことを考えていますので、思い切って申し上げます。美には言葉が要らない。見れば分かる。人間は、樹上生活の霊長類以来目を発達させてきたと原田先生がいられています。見れば分かる。説明しなくてもいい。そういう目を楽しませる魅力的なたまたまに国土をすればいいということ。

日本列島は亜寒帯から亜熱帯まで広がっているので、地球のミニチュアと見立てられます。見立ては日本の文化です。日本は権力の所在地を変えて時代をうつしてきたので、今は東京に権力の所在地がありますから、明治以後は「東京時代」といえます。それ以前は江戸、その前は室町、鎌倉、平安、奈良というように場所を変えてきました。奈良、平安時代には中国の文化を取り入れ、東京時代は西洋文明を入れました。西洋文明も、先ほどおっしゃっていたように限界が見えてきて、西洋の方でも反省の機運が生まれてきている。しからば、西洋文明の受容の優等生としての日本はどうすればいいのか。ポスト東京時代の課題は、場所を変えることではないか。

実は新しい首都候補地として、栃木県的那須野ヶ原が筆頭にあがっています。私はそこに「鎮守の森の都」を造ったらいいと思っています。なぜそういう言い方をするかというと、関東平野と東北の森とのほざまにあるからです。新候補地の場所柄は、森と平野の境です。そこに例えば日本の、北は北海道から南は沖縄の琉球松に至るまで、各地域の名木、しかも100年を超えている銘木を、お弔いをしたうえで、新陳代謝が弱くなっている大木を永久に保存するために、国会議事堂の建設のために集める。各県から100本ずつぐらい

出していただければ 47 都道府県ですから、5000 本近くになります。それをことごとく固体識別をして、どこに生えていたどういう樹木だということを記し、それを国会議事堂に並べると、そこに巨大な床柱群ができます。それらの樹木は神様の依代だったものです。それが一堂に並ぶと壮観です。日本の樹木の代表が一堂に会した日本の森の議事堂です。その森の議事堂をガラスで覆えば、透明性も確保され、人は変わっても仰ぐ自然は変わらない。「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき日本の自然」というイメージができあがるということです。

この構想は、目に見える形で美とか文化を、この国として発信するためのものです。伝統文化を、国際交流基金などを通して訴えるだけではなくて、国全体のシステムを変えることで示すべきところまで来ているように思います。

熊倉先生は「和解」という言葉を出してくださいましたけれども、茶の湯の精神から何か地球社会に発信できるようなストラテジー、戦術はありますか。

(熊倉) どうでしょう。それは大変難しい。個々にはいろいろなことがいわれておりますけれども、本当にそれが有効かということになると、私自身ちょっと自信がないところがあります。今、お話をいろいろ伺っていて、やはり一つ大きなことは神様かなという気がしますね。

先ほど原田さんの言われた災害観といえますか、これはとても面白いことだと思います。日本人みんながみんなそんなふうと考えられるかどうかというのは分かりませんが、災害というのは結構いろいろなものを持ってくるのです。私も小さいころ父の田舎にありましたときに、利根川が決壊して大水に遭いまして、1 週間ほど水の上で生活した記憶がありますけれど、それは面白かったですね。いろいろなものが流れ着いてくるのです。俵が流れ着いたというので、さあ、お米が着いたらろうと広げてみたら肥料だったりして、がっかりして。そうかと思うと、水の引いた後、見たこともないおいしいキノコが山の方にたくさん生えて、何年かそれが食べられたとか、あるいはうちから流れていったらしき背広をよその人が着ていたり (笑)、いろいろなことがありました。そう考えてみると、災害というのはいろいろなものをもたらすのだなという気がいたします。

そういうふうに見えるのは何かというと、先ほどからお話が出ている神という問題が一つ大きなこととしてあるだろうと思います。今、素晴らしい名水が出てくる所とか、ひそかにいい森が残っている所は全部宗教なのです。鎮守の森であったり、神の水であっ



たり、何かそのような一つの信仰というものがまとわり付いているときに残ってくるのです。

そういうふうなことを考えてみますと、どうも西洋の神と全然違うわけで、日本の神様というか、これはアニミズムだと思うのですけれども、多神教ですから、何でもすべての中に神が宿っているという、その神様は、全然もう西洋の神と違いますね。ですから、西洋では神と人間の和解をキリストがするのかもしれませんが、日本人の場合は、自然と人間の和解の仲介者を神がしているのかもしれない。依代の神様も、花が美しいだけではなくて、そこに神が宿るということで、われわれはそこに何か別のものを感じ、われわれ仏様に花を供える。花を供えるというのは、やはりその美しい花を供えるだけではなくて、花の持っている霊力が祖先の方に移って行って、祖先の力を強くして、その祖先がわれわれを守ってくれているのですね。仏壇にお参りするとき、阿弥陀様など誰も考えていないのですよね。お父さん、お母さんのことしか考えていない。あるいはおじいさん、おばあさん、自分の祖先にお願いしているのでありまして、その祖先というものはアニミズムで、これは全部、至る所にいるわけです。

そういう神が介在することによって、われわれのいろいろなものが守られてきている。このことはひょっとすると、日本から世界に発信する、非常に大事な思想なのかもしれないという気はするのですが、いかがでしょうね。

(川勝) なるほど。そのお話を受けて言いますと、日本はなるほど多神教で、やおよろずの神と言います。池坊さんの所は、小野妹子以来の六角堂ですから仏教です。7世紀以来の歴史のある所ですね。南蛮文化の時代にはキリスト教も入ってきましたが、江戸時代に禁教になった後、明治以降は宗教の自由が認められ、キリスト教も入りました。つまり高等宗教としての仏教も、中東生まれの一神教のキリスト教もわが国に入っています。それゆえ、日本のアニミズムは、昔のままのアニミズムではありません。仏教やキリスト教も通過しており、それらと対立するものではないという気もするのです。

日本仏教では「一木一草に仏性が宿る」「草木国土悉皆成仏」といいますが、これは7～8世紀の舶来仏教にはありません。10世紀ぐらいから徐々に、極楽往生はすべての衆生に開かれているという思想として確立した。末法の世という困難な時代の中で出てきた思想で、一見すると非常にアニミズムに近いですが、十分に高等宗教との両立を可能にしたアニミズムだと言えると思うのです。

タイラーというイギリスの文化人類学者が、19世紀の末にアニミズムという言葉を作ったのですが、それは原始未開民族のいわば低段階の宗教のことで、それとは違うということと言わないといけない。キリスト教徒になった内村鑑三は「無教会主義」です。自分の教会の天井は天空であり、わが教会の床は緑なす野原、教会の祭壇は美しい立山や富士山など冠雪した山岳、そして、教会の音楽は小鳥のさえずりだという。鑑三によれば、キリスト教のプロテスタンティズムを徹底していくと、教会も要らない、キリストの像も十字架も要らぬというところまでいっており、自然回帰です。日本の宗教にアニミズムという言葉を使うにしても、低段階の宗教ではなく、筋金入りです。今、先生がおっしゃったそういう宗教観は、決して高等宗教と対立するものではなくて、人と自然との間を仲介する神は、実はわが国に渡来したいろいろな宗教とも融和するものであるとも思います。

今日のテーマは21世紀の環境観ということで、人間はどうして花と緑を求めるのか。キーコンセプトになったのは美ですが、その背景にある日本人の自然観もあぶり出されてきました。まず地球自体が美しくなってきた星だという歴史を示している。そして、人間は芸術を作る存在だというお話があり、その意味で、美を軸にした環境観は十分に普遍性を持ちうると思います。

さらに、今日のお話の一部を借りてまとめますと、ヨーロッパの自然を征服してきた科学・技術は、それが文化・芸術に奉仕する手段だという関係付けができれば、融和できるのではないかと。なぜかといえば、ヨーロッパの科学技術の構成要素に仏教はありません。道教や儒学もありません。構成要素は一神教とギリシャ哲学で、両者が融合して科学になり、技術を生んだと思います。

しかし、人類の財産にはほかにもあります。インドに出た仏教、そして中国の思想があります。それらは日本に入って、両者が融和したのが16世紀、それは生け花や茶の湯のような芸術文化になった。それを科学技術とどう融合させればよいのか。科学技術の限界が明らかになってきた今、日本文化の美と芸術には、自然に対する見方がヨーロッパとは違い、敬虔な心の形を見出せます。これは今日の災害との付き合い方というところで生かせるというお話がございました。

そうしたまとめ方でいいかどうかは分かりませんが、今日の2時間余りのお話をされた上で、それぞれ5分程度ずつ最後のご発言をいただいて、フォーラムを締めたいと思います。それでは、原田先生からどうぞ。

(原田) 川勝先生がおっしゃったように、芸術と科学技術の関係をうまく持っていかなければいけないと。そのときキーワードに、損得抜きか、損得づくかという観点があると思うのです。芸術は損得抜きの世界です。人の心をいかに満たすか、幸せにするか。先ほどの立花、仏前供花の願い事、それはいい願い事に違いないわけです。「あの人をのろいたい」とか、「あのおばあさん、早いこと逝ってくれたらいいのに」と願いながらお花を立てる人はいないはずです。やはり、「みんなが幸せになるように」、「世界が良くなるように」、「平和が戻るように」という、損得抜きの祈りというものがあると思うのです。

一方、科学技術は「効率よく」です。効率とは、結局は損得づくですね。欲得だけの世界です。それが今、損得抜きの世界に覆いかぶさっている。本来、神様へのささげものには値段があってははいけないはずです。値段が付くと、いかに安く作ってやろうとか、いかに早く作ってやろうとか、そういう不純な動きが出てくるからです。それを、科学技術はあまりにも成果が華々しいので、損得づくでいいのだという風潮が世界を覆ってしまった。日本もかなり侵されてしまっている。

お茶にしてもお花にしても、損得抜きの世界を身近なところで実践している人が、日本にこれだけたくさんいる。そういうものはヨーロッパだってあるはずですよ。どこでもあると思うのです。だから、芸術を通じて、損得抜きの世界を復権させていく。その中で自然を損得抜きで見たときに、先ほど川勝先生がおっしゃったように、那須のすそ野を今買っておいたら儲かるのではなくて、この土地をどう生かしていけば将来世代のために一番いいだろうかという祈りに通じていくのではないかなという気がします。

芸術の損得抜きの精神を何とか世界に発信して、皆さんに昔の心を取り戻してもらえば、科学技術者も価値観を変えていくのではないかと期待しています。

(川勝) ありがとうございます。由紀先生、お願いします。

(池坊) そうですね、本当に私たちは今、科学技術の恩恵なしではもう生きていけない。科学技術が非常にいろいろなことをもたらしてくれて、そのおかげで便利な生活をしているわけですがけれども、一步使い方を間違えると、これほど恐ろしいものはないのではないかと。本当に便利なメリットと、非常に恐ろしい可能性を共に秘めているのが、この科学技術ではないかと思えます。

この地球が誕生して 46 億年で、その科学技術の使い方を間違えて人類が減びないために、

人類が減びても、きっとまたほかの生物が生まれてくるのではないかと思いますけれども、でも、その人類が減びないためには、何によって制御できるかという、やはりそれは知恵しかない。では、その知恵というのはどこから生まれてくるかという、やはり知恵を呼び覚ましてくれるものが美であったり、芸術であったりするのではないかなと感じるわけです。

先ほど損得という話も出ましたが、人間はやはり芸術に触れたり、美に触れているときは、本当にお金のことを忘れていて、そして、何よりもとても人間が人間らしくなれるというか、沸々と内側からエネルギーがいい方にわいてくるような、そういう気にさせてくれるのが美や芸術ではないかと思います。ですから、その美や芸術から大いにたくさん教訓を得て、知恵を得て、そして節度、欲望にはきりがありませんけれども、それをコントロールする技を人が身に付けていかななくてはいけないなど。また、それを自分たちだけではなくて、これからの次の世代こそ、美や芸術に触れることによって、いい意味での新しい環境観、自然との付き合い方を学んでいってほしいなと思います。

(川勝) それでは、熊倉先生、お願いします。

(熊倉) 損得抜きということになりますと、ちょっと肩身が狭い思いをします。茶の湯というのは損得ばかりでございまして、あの茶わんが欲しいというと、もう三度の飯も我慢して茶わんを買いに走りますし、あいつの茶わんの方がおれのよりいいと思うと、くやしくて、くやしくて、何とかもっといいのを買いたいと思うのがお茶人でございます。我利我利亡者みたいところがお茶人にはある。でも、僕はその我利我利亡者であることが人さまに幸せをもたらす、自分にも幸せをもたらすような世界というのではないだろうか。こういうことですね。

ですから、先ほどお話のあった今西錦司先生ですが、カゲロウの研究をしていた。これはものすごく僕は面白いことだと思うのです。これは私はちょっと記憶がはっきりしないのですが、カゲロウについて論じたものは、もっと早くからあるのではないのでしょうか。日本で民芸運動を始めた柳宗悦という人がいますが、あの人が最初に書いた『科学と人生』という本は、カゲロウの話なのですね。要するにカゲロウというのは本当に自然のままに好きなことをして、好きなことをすることで子孫にちゃんと伝えていく。思うがままに、自分の本能のままに動くことで、すべてうまく完結していくということを論じておられ

た。やはり白樺の連中は、どこかそういうところがあるのですね。典型的には武者小路実篤です。「仲良きことは美しきかな」、あのようなことを言っているのは、やはり自分が利我利亡者であるということを認識して、でも、何かすべて自分の本能のままに動くことで、それが結局一番幸せであるということを自ら主張したかったのですね。

今西錦司という人もそうなのです。あれは随分すごい人で、私は直接お目にかかってお話ししたことはなくて、遠くから見ていただけですけれども、仲が良かった桑原武夫先生に言わせると、同じ山岳部で山登りをするのだそうですね。本当に困ったときに、どちらの尾根を下るか、どちらの沢を下るかというとき、仲間で見つ二つに分かれるそうです。そういうときにどうするか。リーダーの今西錦司は、反対するやつをばかんと殴って、さっさと下りていってしまうのだそうです。そうすると、仕方がないからみんなついていくというのです。何かそういうふうな、あるがままに生きるようなところが今西先生自身にあった。何かそういうところに、われわれはどこか理想的な一つのものを持ち続けてもいいのではないかという気がするのです。

そういうことを考えてみますと、芸術家というのはある意味でカゲロウのように生活して許される場所がある。われわれはなかなかカゲロウのみたいにはいきませんが、できればそういう人生が送れたらいいなという一つの理想、それは自然とわれわれが、自分の中にある自己を開放する。自己を開放することが自然と矛盾を持たない。和解を持つ、和解できる。そういうふうな在り方というものを、どこか理想として持ちたいなという、そんな気分でおります。

(川勝) 何か付けくわんや、という感じでございます(笑)。孔子は、彼は74歳で死んでいますが、「おのれの欲するところに従って規を超えず」と70歳の理想の形として残しましたが、そうした境地の人生観は恐らく15~16世紀からずっと日本にあったもので、それを熊倉先生は継承されているように思います。

由紀さんがおっしゃった日本人の自然は、西洋で自然とはワイルドですから、コントロールしなければいけない悪いもので、原田先生は悪魔と見ているといわれた。だから、人間がそれを治めないといけない。旧約聖書に、神がアダムとイブを作り、神が作った世界を治めよ、と書かれています。神の姿に似せて作られ、従って神の代理人として人間が自然を治めよ、とあります。そういう西洋の自然観に対し、自然のままがいい。確かにわれわれ日本人は日常そういうように使っています。その自然観をおのれの中に自覚すれば、

心の中に花も紅葉もある。

自然のまま、これは言うは易く行は難しですが、それが日本の総合芸術であり、生活を芸術化した茶の湯に及んでいると私は思います。宗教から、自然観から、技術から、衣食住の数寄屋造り、日本食、礼儀作法、庭造りのすべてに及んでいると思います。

地球が作ったのが自然ですが、その地球は46億年の歴史で最初は火の玉だった。火星級の隕石がぶつかって、その破片から引力の法則が働いて月ができて、そして、裸子植物しかなかったのが被子植物ができて、1億5000万年ほど前に花ができた。その後、人類が500万年前に出てきたけれども、今われわれの直接の祖先はホモ・サピエンス・サピエンス、大体20万年ほど前に生まれたといわれていますが、この人類だけが芸術を作る能力を授かっている。

それゆえ、地球的自然の意思を自覚的にするのが芸術だということになるのではないのでしょうか。美しくなってきたのが宇宙、自然界の意思だとすれば、その意思を神と名付けるか、仏と名付けるか、法と名付けるか、摂理と名付けるか、それはともかく、客観的に美しくなってきたという事実は共有できます。それを踏まえた上で、人間が芸術を作っていくというのは、やはり人間として崇高な行為なのではないか。

としますと、自然が作り上げてきた美しいものを破壊する行為は、慎まねばならない。それは、人間の自然に本来もとることではないか。人間が与えられている能力をもう一度掘り返してみると、そこに知恵があるはずで、その知恵の背景に美がある。その美は実は地球的自然から出てきている。それは、ひょっとするとその向こうに目に見えぬ神の働きのようなものがあって、そうした意思をわれわれは体現しているはずで、美と芸術をわれわれは作っていかなければならない。そうしたものを最も発揮できる、地球上の現存在の中での立場にいるのが日本ではないか。なぜかという、東洋の成果である仏教と儒教、西洋の成果である科学技術を、われわれは自分のものになっているからです。

美や文化や芸術は人工的ではありますがけれども、いかにも自然に作り上げていく。自然をもっと自然にするという志向を持つ。それは実は美しくしようという地球の意思の体現であるということになります。お話を聞いていて、日本の使命はやはり大きいなという印象を持った次第です。

今日の結論は、私の人選は良かったということでございます(笑)、原田先生、池坊先生、熊倉先生に心から御礼を申し上げ、また、最後までお付き合いくださいました皆さま方に御礼を申し上げまして、このフォーラムを終えたいと存じます。どうもありがとうございます

ました（拍手）。